

## うえすとさいど

「強度行動障害」があっても地域で生活を  
2年間にわたるプロジェクトの成果

自分の体を傷つけ、他人に乱暴する、ものを壊す、大声を発し、突発的な行動に出る—といった「強度行動障害」のあるひとが地域で生活するには、本人や周囲がどんな準備をし、どんな仕組が必要なのか。そのモデルケースとして、2022年度から「地域生活移行プロジェクト」がスタートしました。この2年間、プロジェクト・チームが一丸となって取り組んだ対象者こそ、前回「まちかどマイウェイ」で紹介した千頭（ちかみ）雄介さん（43）です。にこやかな表情で一人暮らしを始めるまでになったのは、プロジェクトの大きな成果といえます。一方で課題もみえてきました。2年間の経過と参加したひとたちの想いや課題について語ってもらいました。

「強度行動障害」は知的障害と自閉症をあわせもつひとに多く見られます。「言葉によるコミュニケーションが苦手」という特性から、自分の意思を人に伝えられず、また、相手も「どう対応してよいかわからない」などのミスマッチが重なって、お互いを理解できないことから起きるといわれています。しかし、適切な環境と支援を受けることで地域で落ち着いた生活することが可能です。

千頭さんもこの2年間のサポートですっかり落ち着きを取り戻しましたが、ここまでは険しい道のりをたどってきました。

2013年に入所施設を退所し、少人数で家庭的なケアを受ける障害者のグループホーム（GH）に入居。「ふせまちかど相談所」はGH入居時から計画相談支援を担当しました。しかし、GHになじめず強度行動障害が悪化し2年で退所。その後しばらく精神病院を転々として。

この間、市や「わットライ（現在の基幹相談支援センター）」、「創思苑（林淑美理事長）」などと協力して対応の模索をつけました。その結果2017年3月、「強度行動障害」を専門的にサポートする大阪府立砂川厚生福祉センター「いぶき」（泉南市）に

入所することとなりました。いぶきは重度障害者の地域生活への移行を目指してケアをしており、ここで一定期間ケアする間に東大阪市が設置する自立支援協議会（行政・支援者・当事者がより良い障害福祉を実現するために協議する場）の地域移行・地域定着部会を軸に千頭さんを受け入れる準備をするという方針も決めました。

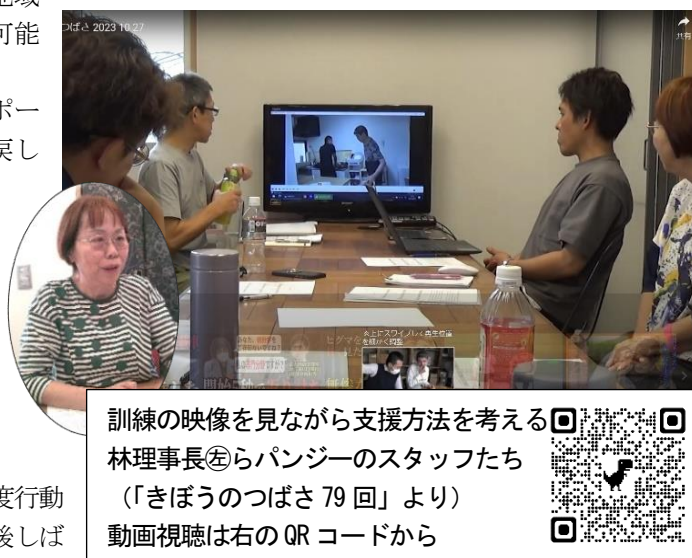
入所後は半年に一度いぶきで行われるケア会議に、市（福祉事務所）、基幹相談支援センター、ふせまちかど相談所が参加して経過を把握していました。4年間にわたる「いぶき」でのケアで千頭さんの強度行動障害はある程度落ち着き、地域生活への移行も視野に入り始めました。

しかし、強度行動障害のある千頭さん受け入れに手を上げる市内の事業所はなく、砂川厚生福祉センターから「他市には、強度行動障害の方を受け入れるGHもいくつかあるので、こちらで地域移行を進めではどうか」という提案があり、その方向で進みそうになりました。

これに危機感を持ったのが、「創思苑」の林理事長でした。それまでは他の事業所にも輪を広げることを優先して、自施設での受け入れに慎重だったのですが、「強度行動障害の人は東大阪で暮らすことができない、居場所がないというのはおかしい。自分の育った街で暮らしたいとの思いを叶えられるよう、選択肢を準備しておくべきだ。」として、千頭さんを再び東大阪でケアすることに創思苑が手を上げられました。

このことをきっかけに、「千頭さんが生まれ育った東大阪市で地域生活を送れるように、さまざまな支援方法を検討し、実現させる。また、その取り組みを強度行

動障害の方を東大阪市内でケアしていくためのモデルとして生かしていく。」という目的で、2022年4月、東大阪市自立支援協議会の中に「地域生活移行プロジェクト」が設置され、市全体でバックアップすることになりました。（2面に続く）



訓練の映像を見ながら支援方法を考える  
林理事長らパンジーのスタッフたち  
（「きぼうのつばさ 79 回」より）  
動画視聴は右のQRコードから

# 実った支援の輪 地域生活は GH ではなく「一人暮らし」へ

(1 面から続く)

## ■地域生活移行プロジェクトの概要

プロジェクトチームの構成は、座長に国内外で多くの強度行動障害のケア体制を研究し経験豊富な同志社大学の鈴木良准教授を迎え、強度行動障害のケアに対する助言は、「対人関係発達指導法」(RDI)の指導者として、池下沙祐里さんが参加、創思苑が事務局を担当しました。市担当者、基幹相談支援センターに加えて、ふせまちかど相談所も計画相談担当して参加しました。

プロジェクトは千頭さんの支援について考える会議と東大阪市の制度について検討をする全体会議をそれぞれに開き、支援の中で起きる様々な

課題を検討するとともに、障害者を支援する東大阪の事業所と情報を共有し意見交換する態勢を整えました。

千頭さんが「いぶき」の担当者と一緒に創思苑クリエイティブハウスパンジーを訪れたのは 2022 年 6 月。最初は「いぶき」と同じ作業を取り入れて不安を感じさせない配慮をし、施設内の食堂で食事、休憩時間には他の利用者と同様に外出し、コンビニで買い物も経験しました。

## ■プロジェクトの取り組みと終結

こうした訪問を何度か繰り返し、パンジーで過ごす時間を増やしていきました。パンジーでは池下さんの指導で RDI を活用した取り組みを実施。その効果から、支援者は自信をもって支援に取り組むことができました。日常生活を撮影した映像を利用して情報共有し「支援者が千頭さんに指示を出そう、教えようという気配が強すぎる。それでは千頭さんが警戒してしまう」などの意見が交わされました。プロジェクトの会議でもこの映像を活用しました。

こうして体験は順調に進みましたが、9 月に初めて実施したグループホーム (GH) 体験で問題が起きました。千頭さんは大きな声を出すことがあり、近所から苦情が入ったのです。しかし大きな声は千頭さんが気持ちを伝える手段ですので止めることはできません。プロジェクト会議で対策を協議し、①防音工事の必要性②他の利用者と互いに影響をうける GH ではなく独居を考慮するという 2 点が確認されました。独居に当たっては、ヘルパーが 24 時間



奈良・平城宮の朱雀門を訪れた千頭さん  
(パンジーメディア「きぼうのつばさ 86 回」より)

対応する重度訪問介護を利用する方向で調整を始めました。

年明けの 2 月に住宅が見つかり、防音工事等の改装を経て 7 月から 2 週間ずつ宿泊体験が始まりました。そして千頭さんは 9 月 4 日に地域生活を再開する日を迎えたのです。ただ、地域生活が本格化する 2024 年度の 3 年目の取り組みに入る直前に市から「千頭さんの独居は本人の特性から

理解できるが、国の方針や財政的な問題もあり強度行動障害の人の地域移行モデルは基本的にグループホームを考えたい」と、このプロジェクトの終了を決められました。

たくさんの方々の知恵をあつめ、ようやく実現した千頭さんの独居で得られたこと、見えてきたことは貴重なものとなりました。前号でお伝えした彼の笑顔とともに、これを支える社会システムの構築にはまだ時間が必要なのかもしれません。(前川 敦)

## ■地域移行プロジェクト座長 鈴木良准教授

千頭さんの障がい特性、強度行動障害があるということを書いて重度訪問介護のサービスを利用して一人暮らしということを積極的に考えるべきと当初から考えていました。

障害者権利条約の第 19 条には「障害者が、他の者と平等を基礎として、居住地を選択し、及びどこで誰と生活するかを選択する機会を有すること並びに特定の生活施設で生活する義務を負わないこと」とあります。これは障害者でも自由に住む場所に住む人を選べる、その機会を与えられているということです。GH の一番の課題はサービスと住居が一体化していること。別の場所で生活するためにそこを離れると途端にサービスも失ってしまう。これでは人権が保障されているとは言い難い。サービスと住居を分離して考えることで住居を選択する自由が生まれます。

千頭さんのケースも最初から「人はどうあるべきか」という観点から考えてもらいたかったという思いはあります。今の権利条約の動向も踏まえて千頭さんの人権を考えたときにこういう風にしていくべきと考えて進むことができればよかったと思います。

## ■社会福祉法人創思苑 理事長 林淑美氏

私は自分の入所施設で働いた経験から他の人よりも強く「入所施設はだめ」と思っています。そういう思いで 2007 年に法人として大阪府から地域移行支援センターの事業委託を受けました。このときに受け入れをした A さんは強度行動障害のある方で結果的にお亡くなりになりました。このことを通して感じたのはやはり強度行動障害の方を一つの法人で受け入れるということの難しさです。このまま受け入れを継続すると職員がつぶれてしまうかもしれないと思ったこともありましたが、千頭さんも最初に出会った時は精神病院を転々としていて、今の状況では受け入れは難しいと思いました。でも色々な経過の中で受け入れをすることを決めました。千頭さんを通して職員も自分の支援を見直すことができました。そして千頭さんの笑顔を何度も見ることができました。

変わるべきは本人ではなく、支援者—千頭さんとのかわりの中でもこれは大切にしている思いです。





## 自己肯定感を広めて世の中を Happy に 就労移行支援事業を支える アミューの「クレド 14 か条」

### 【第7回】

いわさき まさよ  
岩崎 勝代さん

(一般社団法人「アミュー」代表)



「自己肯定感を広めて世の中に Happy を増やしていく」をミッション(使命)に掲げる「アミュー」は、一般企業で働きたい障害者を支援する「就労移行支援」や「自立訓練」等の事業をパワフルに展開しています。代表の岩崎さんは、「ふせ支援ネットワーク」の理事も務め、当事業所の利用者さんの支援を連携して行うことも多く、まことに頼もしいサポーターです。

岩崎さんがアミューを立ち上げたのは 2012 年 2 月。それまで八尾市内の障害児童の入所施設や就労支援施設に勤務。アミュー創設を思い

立ったのは、「就労支援の仕事に移った時、元の施設にいた利用者、ハルさん(仮名)を思いだしたから」だとか。

ハルさんは 18 歳になり児童施設入所の資格を失ったのですが、そのままとどまっていたのです。ハルさんは自分の服をビリビリに破って布切れのようになった服を器用に体に巻きつけていました。風呂に入るときはそれを巧みに着脱します。

### 障害あっても秘められた能力 引き出す支援活動

学校を卒業したハルさんは日中活動として簡単な作業を行う決まりでしたが、いつも園庭のブランコで遊んでいました。あるとき、トタン屋根などを固定する「フックボルト」をセットにして箱詰めする作業を頼んでみました。「あれだけ上手にボロボロの服を着脱できるのだから、手先は器用なのに違いない」と思ったからでした。

「ハルさん、ネジとボルトの間にワッシャーをはさんで、こういう風に組み立ててね」と岩崎さんがやって見せると、なんと手際よく 10 分間で 50 個を箱に詰めたのです。その日は 200 個も作りました。こうしてハルさんは初めて工賃をもらい、100 円ショップで欲しかった磁石を買いました。働けばお金をもらえ、好きな物を買える—という貴重な体験をしたのです。

### ふせ支援ネットワーク賛助会員

東大阪店舗管理センター  
カットハウスAmi  
昭和印刷出版株式会社

Craftbeer Tavern  
一般社団法人アミュー

「ハルさんに限らず障害のある人も、どこかに潜在能力を持っているに違いない。それを見つけて引き出せば、力を発揮できる。世間の人は『障害のあるひとは何もできないんじゃないか』と思っているけど、そんな社会と障害者の橋渡しをしたい。そのためには就労移行支援事業だ」との思いを強くしたのです。

アミューのもう一つの柱は、女性が働きやすい職場。

「児童施設には虐待を受けた子どもたちが多いです。職員が一生懸命世話をし、家庭支援の成果も実ってやっと家に帰れたのに、また虐待を受けて施設に戻ってくる」

なので「虐待をなくす」という仕事ではなく、お母さんたちを元気にしたい、そういう社会づくりをしたい—と、パートを含めて約 25 人のスタッフのほとんどが女性。朝、「子どもが熱を出した」と遅刻や欠勤の連絡があっても「子どもさんをきちんと世話してから出てきてね」と、お互いがいたわり合える職場と自負しています。

### 感動伝える朝の「クレド」1 分間スピーチ

そうした環境を支えているのが「クレドカード」。クレドとはラテン語で「信条」という意味で、現在はカードに 14 か条の行動指針が書かれている。失敗したり、クレームがきたり—などの時に、立ち止まって考える。クレドはその振り返りに

役立っています。

クレド①は「生まれてきてよかったと思ってもらえる行動を起こす」、②は「人に思いやりと敬意を持ち、安心して働ける職場に」。「自己肯定感」や「主体性」「互いの尊重」を重視した指針で、いずれもみんなで話し合って決めたこと。毎朝、「クレド会議」を開き、自分が経験した「うれしかったこと」を 1 分間スピーチで報告し、常に「自己肯定感」を高め、自信をもって仕事に打ち込める心の準備をしています。

アミューを訪問するたびに職員さんたちのさわやかな対応に感激するとともに、エネルギーを感じます。これもきっと「世の中を Happy にする」クレド効果! この Happy はアミューのある地域にも広がります。「ご近所さんにはいつも励まされているので、そのお返しとして近くの公園で毎年、フェスティバルを開催。コンサートやフラダンス、軽食など家族で楽しんでもらっています」今ではその公園の公園愛護会を地域の方から引き継ぐ形で法人として受けて、毎週月曜日清掃をしています。

フェスのフラダンスの輪の中に岩崎さんの姿も。ハワイアンが好きでウクレレの演奏を趣味にしていたのですが、4 人の子どもの育児にアミューの運営…テンテコマイの中でも「やっぱり自分を大切にしなければ」と娘さんと一緒に習い始めたそうです。

ちなみに岩崎さんの末っ子は当事業所の放課後デイサービス「そだちの家」に通っています。「愛にあふれた支援に感謝」と、最高の「自己肯定感」をいただきました。

(武石 朱音)





## 裁縫が得意なKさんのオリジナル作品集 お札とコインを自動分別 アイデアポーチも



学生時代は苦手だったミシンも、今は自由自在に操るKさん㊤。自作のストールに「かわいいでしょ」㊦



真ん中のポーチは上からお札と小銭を一緒にいれると小銭だけ下に落ちる仕組み

「今は、いろんなポーチやバッグを作るのは楽しいけど、学校時代は、家庭科の授業は得意じゃなかったのよ。課題だったパジャマは卒業してからやっと完成したの」と、三十数年前を振り返るKさん（50代）。

今は就労継続支援B型事業所「夢織り工房 空の木」で、内職の他に帽子やポーチなどたくさんの作品を作っています。昔務めた会社はいわゆるブラック企業で、ひどい上司に悩まされました。でもそこで服飾の仕事をとくさん覚えたので、ポーチなどの小物づくりはお手のものだそうです。ネットで面白い小物を見つけては、自分流のアイデアを加えて作ることも。知人にプレゼントするととても喜んでくれる。Kさんの作る商品は生地柄も個性的！ザリガニやレモンなど世界に一つのオリジナル作品です。



ザリガニのバッグ（右下）は外ポケットがクリア素材になっています

## ラーメン博物館で「マイカップヌードル」 防災センターで避難訓練も

5月25日、東大阪市消防局にある防災学習センターへ。火災や風水害、地震などへの備え大切さを3Dシアターで学習した後、煙避難体験、被災地体験、初期消火体験をしました。学校でも避難訓練をしているので、スムーズにできました。

「避難する時は緑のマークを見つけましょう」という新しい知識も教えてもらい、復習したり新しい発見をしたりと、有意義な時間を過ごしました。最後に色んな種類の消防車が並ぶ前で、それぞれが特別な役割を持っているという説明に、目をキラキラとさせながら聞いていました♪



### そだちの家 社会見学会

5月27日、代休を利用して池田市にある「カップヌードルミュージアム大阪池田」に行ってきました！電車で約1時間、車内でも「自分のオリジナルなカップヌードルを作れるらしい」とみんなワクワク。

お目当ての「マイカップヌードル・ファクトリー」では、さっそく自分でデザインしたカップに、4種類のスープからお好みのスープ、12種類の具材から4つのトッピングを選びます。「私はカレー味」「僕は、キムチとコーンと謎肉」—と大はしゃぎでした。



### ■「自然観察会」9月15日開催決定！

6月9日に予定していた「つるみ緑地で自然観察会」は雨のため中止になってしまいました。楽しみにしてくれていた方々のためにも！秋に開催決定です。詳細は後日お知らせします。参加お待ちしております。